令和２年度　第70回高知県芸術祭

第49回高知県文芸賞
入選作品集

国史跡「岡豊城跡」

beyond 2020

文化庁

高知県芸術祭執行委員会

令和２年度　文化庁
文化芸術創造拠点形成事業

写真の櫓は、県立歴史民俗資料館が「志国高知　幕末維新博」の開催に合わせ、国史跡「岡豊城跡」の詰にあげたもので、平成29年４月から一般公開されましたが、国史跡内での約２年間限定の設置許可であったため、既に解体のうえ撤去されております。

一般公開の期間中には、戦国の世に、土佐一国から四国統一を目指した長宗我部元親の居城跡にあげたものでもあり、全国から約４万人もの大勢のファンの皆様にご来城をいただきました。また、天正５年には、元親が連歌会で「四万(よも)はみな汲手(くみて)になびく霞哉(かすみかな)」と詠んだ史料が残されており、一説では四国制覇への野望を託した句ともされ、それは当時の城内での出来事ではなかったかと推測もされるところです。

それから５年後の天正10年には、元親の盟友とも言えます明智光秀が「本能寺の変」で織田信長を討ったものの、そのわずか13日後には羽柴秀吉に敗れ去り、元親の方は３年後の天正13年に一旦は四国全土をほぼ統一したとも言われますが、それも束の間、同年秀吉の四国攻めの前に敗れた後、なんとか土佐一国のみを安堵されることとなります。

表紙の写真は、令和元年度の岡豊山フォトコンテストで最優秀賞を受賞されました都積覚さんの作品『晩秋』で、氏のご厚意により今回使用させていただいたものですが、写真にある晩秋の櫓に想いを巡らしますと、元親・光秀という浅からぬ縁(えにし)で結ばれました二人の戦国武将の間に、何か歴史の因縁めいたものも感じとられるところです…。

令和２年度　第70回高知県芸術祭

第49回高知県文芸賞
入選作品集

文芸賞・文芸奨励賞・佳作

国史跡「岡豊城跡」

もくじ

〈短編小説〉

高知県文芸賞
最後の帰省……内山眞知子……1

高知県文芸奨励賞
消えた人……山﨑静香……6
二度とないもう一度……川村智保……11

〈詩〉

高知県文芸賞
1分と40秒……矢野ゆかり……17

高知県文芸奨励賞
湯灌の儀……山﨑詩織……19
3DKの戦地或いは祈りのない教会……阿部美晴……21
chagrin（シャグラン（悲しみ））に君をそっと包んで……下元真人……24
手の中……栗山文子……25
眼差し……都築悦子……27

佳作
T君へ……小笠原毅……29
ひとときの……和田由香……32
でんとした存在……千里日月……35
笑……尾崎弘二……38
うつらうつら……甫木恵美……39

〈短　歌〉
高知県文芸賞……西原時子……42
高知県文芸奨励賞……岡松模子・熊谷敏郎・多田眞理子・田上悦子・中平琉央……42
佳作……北添起代子・梶原和歌・大石綏子・山本咲愛・戸梶沙南……44

〈俳　句〉
高知県文芸賞……安西佐和……46
高知県文芸奨励賞……古田彩香・浜田博子・井上志津・山路一夢・橋田千春……46
佳作……山本世志恵・山下昭文・山﨑光子・山﨑紀美子・岡林知世子・乾真紀子・矢野重雄・西込とき・長山凜・岡林愛……48

〈川　柳〉
高知県文芸賞……立花末美……52
高知県文芸奨励賞……辻内次根・遠近哲代・前田直希・近藤真奈・山本登……52
佳作……近藤糾・山﨑光子・徳永逸夫・曽我部仁志・桑名知華子・髙橋治光・中村蒼真・楠瀬美香・江口桂子……54

〈審　査　評〉……58

〈作品募集要項〉……63

短編小説

最後の帰省

香南市　内　山　眞知子

瀬戸大橋を渡り終わると、車は岡山方面に向かってスピードを上げた。輝之は三十年間、どれだけ往復したか数えきれないこの橋を、もう家に帰るという意味で渡ることはないのだと思うと、なんとも言えない寂しさが募ってきた。

今回の帰省は、岡山にある生家の売却のためだった。自分が生まれてから関西の大学に入るまでの十九年間、両親と兄と祖母の五人で暮らした家である。

大学卒業後も岡山には帰らず、二十九歳で高知の私立学校で教師として働き始め、今年で三十三年になる。だから両親と暮らした日々はかなり昔のことであり、それほど家に対する思い入れはないと思っていた。

この三十三年の間に、父と兄ががんで亡くなり、祖母も九十過ぎまで生きて亡くなった。生家で一人暮らしをしていた母も十年近く病院暮らしをした後、三年前に鬼籍に入った。

「退職したら岡山に帰ってきてここで暮らせばいいよ」と、冗談とも本気ともつかないことを言っていた母の言葉を思い出すが、今となってはもう帰る意味もない。両親のいない生家に帰って新しい生活を始めるより、高知で生活を続ける方がかなり現実的である。

共に戦争で苦労したが、懸命に働いて生き抜いてきた両親が苦労して建てた家だった。しかし、最近では空き家が増えて問題になっているという記事も目にしていたし、不動産を持っていることが逆に足かせになるとも耳にしていた。不動産が「負動産」になるなんて、苦労して家を建てた両親が聞いたらどう思うだろうかと輝之は寂しくなった。子供のいない自分たちが死んだ後に、甥や姪に苦労をかけるのも忍びないので、自分が元気なうちに売ろうと決心したのだった。

そんなことを思い巡らせていると、車は山陽道から降りるインターに迫っていた。インターを降り、見慣れた風景を横目に見ながら運転していると、この前来たときにはなかった店が新装開店の準備をしていた。岡山市内から三十分という通勤圏内ということもあり最近では移住してくる人が増えたと町の移住促進課の職員が言っていたのを思い出した。輝之が家を売ることに決めた時に真っ先に相談したのも、移住促進課だった。担当者は借家として貸して、気に入ったら購入してもらったらと勧めてきたが、そんな時間の余裕はなかった。なるだけはやく売りたいからと直接購入してくれる人を探してくれる業者を紹介してもらった。

「いやあ、ここの家はなかなか面構えがいいですよ。絶対に売れると思います」不動産屋の田中は言った。実家のすぐ近くに高速道路ができるというので隣近所の家が県の収用に引っかかりなくなったせいで、高台に一軒だけ残り立派な家が建っているように見えるのだった。田中はまるですぐに売れるかのように言った。最初に提示された値段を聞いて正直驚いた。そんな高値で売れるのかと頭の中で計算し、「負動産」ではなく老後資金の足しになるのではないかくらいに喜んだものだった。しかしそれからが長かった。田中からは音沙汰なしで、たまに連絡があると庭の雑草が伸び放題で見に来た客に印象が悪いから草刈りの必要があるとか、家の中の片付けをして処分をしてくれないかという電話だった。「面構えがいいからお客様は期待するんですよ。いい感じだと思って中に入ると前に住んでいた人の生活感がありすぎて新しく生活していくイメージがわきにくいみたいで……。たくさんお客さんは見に来ているんですがね」いいわけがましく喋る田中の言葉を聞きながら「売る売る詐欺」ではないかと何度思ったことだろう。登記などの手続きに費用がかかることは承知の上だったが、シロアリがいるといってはシロアリ駆除をし、境界が曖昧だからと測量をし、家もお化粧をした方がはやく売れるからと床板をはがし大工工事までするはめになった

のだ。結局高知にいて、岡山の家を売るには業者に任せるしか仕方ないとあきらめた。
助手席の妻がちょうど同じことを考えていたのか、
「家を売るのって本当に大変だったわね」と言った。
「本当にそのとおりだね。やっとこの日を迎えることができて良かったよ」
「長かったわね。でもお父さんとお母さんが苦労をして建てた家だもの、いい人に住んでもらいたいもの。結局待っていてよかったんじゃない」
これまでにも何度か買い手がつきそうなことがあった。
「しつこく値切ってきた人に売らなくて良かったと思わない？」
「あれはひどかったよね。気に入っているといいながらなぜか自分の引いた線以上の値段を出したくないって」
「そうそう、あの田中さんが値下げしても売りたいかってきいてきたものね。不動産屋としてもちょっとあの人には売りたくないと思うって」
「出て行く身としても近所の人とうまくやってくれる常識的な人に売りたいしね」
そんなことを話しているうちに車は実家の高台に行く最後の曲がり角まできていた。そこを曲がると家まではなだらかな坂道だった。何度この坂を登ったことだろう。

高速を降りた所で母に電話をかける。
「今、インターを降りたところ。もうすぐ家に着くから」インターから家まで三十分くらいだった。曲がり角から家の庭で立って待っている祖母の姿が必ず見えた。
「てるちゃん。高知からもう帰って来る頃じゃと思うて待ちよったんじゃ」
祖母の話し声に気付いた母が出てきて、
「もう着く頃じゃと思うとった。はよう家に入られえ」
懐かしい岡山弁を聞くと家に帰ってきたといつも感じた。国語の教師のこだわりで岡山弁も土佐

弁も喋らず標準語で通してきた自分だったが、岡山弁を聞くとホッとした。祖母も母もいなかったが、幻影のように脳裏に姿が浮かぶ。何度となく繰り返されたやりとりがそうさせるのだと思った。

車を庭に入れる。庭の植木の剪定はされてから時間がたったせいで、もうすでに伸び始めていた。父が植えたさつきの花が昔と変わらずに咲いていた。

「この前来たの、いつだったっけ?」

妻が不意に言った。いつだっただろうか。しばらく考えて、

「母の三回忌の時じゃなかった?」と自信なく答える。

「あの時は家に入らずに法要だけしたんじゃなかった?」

二人とも記憶が曖昧だったがしばらく家の中に入ってないことだけは確かだった。

鍵は田中と町役場の職員が案内に使えるように納屋に置き場所を決めて、自由に出入りしてもらっていた。鍵で玄関を開け、久しぶりに家の中に入った。

中に入って自分が知っている家とは、まったく違っているという事実に気がついた。すべてのものが取り払われ、大工工事までされた家は、自分の記憶に残っている生家ではなかった。

「新しく購入する人が新生活を描きやすいように、前の居住者の影を消すのが一番なんですよ」

田中の言っていた通りだと思った。父母の住んだ形跡は跡形もなく、家はただの箱になっていた。父と母の生きた事実まで消されていくようで怖かった。それにあらがうように部屋の中を歩きながら意識的に思い出そうとした。ここの台所で母がいつも座っていて、ここの仏間で父の法要をして、ここのリビングの壁に家を上から撮った航空写真が飾ってあって……。

今まで売ることばかりを気にしていたが、もうこの家に二度と来ることはなく、人手に渡ってしまうのだと改めて思うと、最後に自分の頭の中に

思い出を刻みつけようとした。
輝之は就職も結婚も人よりずっと遅かった。そのことをうるさく言われるのが嫌で、正月以外は帰らない年が続いた。就職し結婚してからやっと大手を振って帰れるようになった。父と母に心配をかけ続けた人生だったが、いつもこの家には変わることなく暖かく迎えてくれる両親がいた。
妻が「ちょっと寂しいわね」と自分の心を察したかのように声をかけてきた。
「この家を買ってくれる人、気に入って買ってくれるんだから、お父さん、お母さんもきっとわかってくれるわよ」
「……。」輝之は言葉が出なかった。
（本当は帰ってきて一緒に住んでほしかったんだろうなあ……。）
時計はもうすぐ十一時になろうとしていた。田中が購入者を連れてきて、この家で会うことになっていた。今日は大安だった。この日を選び、新生活を始めようとする購入者の気持ちはわかるような気がした。新天地に希望と期待を抱いているのだろう。すべていい日から始めたいと思って当然だ。
まだもう少し時間がある。彼らが来るまでの時間、両親と過ごした日々を心に刻みつけ、この家との最後の別れをしようと輝之は思った。

消えた人

香美市　山崎　静香

背後から音もなく疾走する自転車乗り、軽快に腕を振り駆け抜けてゆくランナー、部活帰りの高校生は膨らんだスポーツバッグに、泥と汗の臭気を封じ込めてペダルをこぐ。見知らぬ人たちが行きかう散歩道は、車道と歩道が植えこみで分離されている安全地帯である。二人連れの人、犬を連れた人、よく会う女性に今日こそは私から会釈しようと、ずっと手前から目線が合う距離を想定していても、近付くと先に視線を外されるとひどくバツが悪い。桜のはなびらを掌に受け損ねたように心が残る。

ある日の夕方、こんな時刻には会ったことのないムギワラ帽子のおじさんが、自転車に乗ってだんだんと近付いてくる。目が合うと、

「今からですか」

と、私から声をかけた。

「やあ、昼間は暑うて、こたえる」

おじさんは笑いながら近くのさえんじりに向かった。ムギワラ帽子に縞のシャツのいで立ちで定年は過ぎているだろう。

住まいも、名前も知らない。さえんじりで仕事していると、たまに話すだけの、ただそれだけの間柄である。もう何年もおじさんの畑を見ているが、いつも箒で掃いたようにきれいに整っていて美しい。

小さい草に至るまで一本ずつ根本から抜きビニール袋に入れ、堆肥に再利用し、大根や白菜の外葉など散乱しているのを見たことがない。野菜の支柱を縛ったヒモ類の切れ端や木片、肥料袋など一つも落ちていない。おじさんはよほど几帳面できれい好きだろうと、畑を見るのが楽しみで気持ちよい。

私の生家も百姓で、子どもの頃は草引きを手伝わされたが、これだけは嫌であった。鍬で根を切っては土をかぶせてごまかし、喉が渇いたの、

おしっこだのと理由をつけて家に帰り大方サボっていた。

おじさんの畑には季節毎に私にも馴染みの野菜が植えられている。家族がいても食べきれないと思うが、無農薬で除草剤を使わず安全な野菜を嫁いだ子どもや、親せきに送ってやっているかもしれない。近所や知人にも分けてやり、きっと喜ばれているだろうと、おじさんの家族や食卓まで想像してしまう。

ときに私の家の玄関にビニール袋がぶら下がっていて、ナスやキュウリ、オクラなどさえんじり直行の新鮮野菜が入っていて、誰だかすぐわかりおかずの友となる。

「この間のナス、酢味噌で美味しかった」

と、作り主に後お礼で通じる。おじさんもそんな経験を何度も味わっているに違いない。

しばらくすると畑の南瓜が枝葉を伸ばし葉が茶色く枯れ始めるころ、畑を見て思わず笑ってしまった。なんと、南瓜が座布団を敷いているではないか。その正体はと目を凝らすと、ペットボトルの底を三センチほどカットしへこみ部分にうまく鎮座している。片手に載る小ぶりな南瓜が土で汚れないよう保護している。ごろごろした土の上より余程居心地がいいのか、ふくよかに丸んでいる。こんな心配りもおじさんには普通のことだろうが、丁寧な人柄にひとりでに笑みがこぼれた。

そのうち南瓜の葉もほとんど枯れ茎がむき出しになると、私の趣味の写欲が次第に募ってきた。ある日、畑のおじさんに思い切って、

「こんにちは、あの、相談がありますけど」

と遠慮しながら道路から声をかけると、おじさんは草むしりの手を止め顔を上げた。

「あの、南瓜が面白いので撮らせてもらえないでしょうか」

「南瓜？　ああ、あれはもうちょっと実が入ると美味しうなるがねえ」

そう笑顔で言った。

「いえ、私、写真に撮りたいので、畑に入っていいのかと」

「ああ、そうか、こんな物が面白いかね」

おじさんは勘違いに気付き、私は説明の仕方を反省しながらも、了解を得ると慌ててカメラを取りに帰った。おじさんは仕事を続けていた。きれいな畑に初めて足を踏み入れると、座布団の上に何個もの南瓜が行儀よく鎮座し、枯れた茎はメロンの網目のように土にへばりつき面白い構図。失礼します、と思わず言葉が出た。広角レンズいっぱいに南瓜を捉え、光線や角度を変え、何回もシャッターを押した。その間もおじさんは私には無関心で俯いて草を引いていた。

帰り際お礼を言ったあと、

「いつも丁寧にお世話ができますね」

と言うと、

「いやあ、子どもらが美味しい言うて食べてくれるので、楽しみに作るだけよ」

と目を細めて笑顔になった。

やっぱりそうであった。食べさせたい人達がいるから草が生えれば根気よく抜き、南瓜に座布団まで当て、愛情を注いで育てているのだ。美味しいという筈である。

私の謎が一つほどけた。畑の隅には珍しくウドがあり、春には籾殻の下から緑濃い葉が出てくる。おじさんは土に埋もれた茎を掘り土佐酢で晩酌の一品にしているだろうか。ウドの畝の端には私の好きなリュウキュウが申し訳なさそうに小さな葉をのぞかせている。我が家の庭先にも放置しているのに、ひとり生えで食べきれないほどにリュウキュウが育つ。酢物や汁の具材にと夏中飽きもせず食べ、育ち具合は私かな？　と思いつつ未だにおじさんの名前も住まいも知らない。

日暦が一枚ずつめくれ、エンドウ豆が実り収穫できる頃、私は畑の異変に気がついた。

おじさんが畑に来なくなっていた。

エンドウ豆は実がはじけ次第に茶色く立ち枯れはじめた。新しいニンニク玉が店頭にではじめても、畑のニンニクは植えたまま、収穫する気配もなく、見るたび気になって仕方ない。おじさんはニンニクを愛し、植えながら初鰹の切り身に、ニンニク玉をかりっとかじり、舌先に辛みを思い浮かべながら植えただろうに…

いつになっても立ち枯れたまま人の入った気配はない。草は一雨ごとに蔓延し、取り残された大根にはとうとう黄色の花が咲き、みるみる耕作放棄化してしまった。

おじさんは一体、どうなってしまった！

なぜ、来ない…

丁寧に草を抜き、美味しいの言葉に励み野菜を育てていたのに、突然、畑に来られない何かが、体を襲い日常が破壊されてしまったのだろうか。

すると、ある日散歩の時間を早めに畑の傍まで来ると、うずくまってわずかに動いている黒っぽい人がいた。帽子を被っているがおじさんではない。今までに見たことのないその人はニンニクを抜く気配はなく、枯れたエンドウを丸めただけで、蔓延した草に立ち向かう気力もなさそうに茫然としていた。

誰だろう、畑の「あるじ」は？　と問い掛けただけで崩れそうに佇んでいた。私にはそれはできなかった。その後再び見かけない。

そんな事があって数日雨が続き、久しぶりに畑の傍まで来て、私の足は止まった。

誰かが来た形跡がある。おじさんではない誰かが除草剤を散布し、背伸びした草は草刈り機で刈り取られ散乱していた。畑の隅にあった道具小屋も撤去され、私はおじさんが再び野菜は作らない予感がした。畑はすっかり様変わりしおじさんの姿を見ないまま、数日すると畑の不思議はまだ終わらなかった。

トラクターが入ったとみえ、土は掘り起こされ平らに整地し、真っ新な土の絨毯になっていた。一本いっぽん丁寧に抜いていた草は機械の力で一撃のもとに圧死されていた。

この変貌ぶりは、こつこつと丁寧に野菜を育てていた真摯なおじさんからは想像もできない。何回か言葉を交わし、仕事ぶりを見るだけで心が満たされ、何の根拠もないのにあたりまえの日常が続くと思っていた。

私は雨が続くと散歩するのを休み、ひでりには熱中症を恐れて外へ出ることが少なくなってきた。楽しみにしていた野菜畑がもう見られないと

思うと足もひとりでに鈍くなる。
しかし畑のその後が気になって仕方ない。
久しぶりに信号を渡ると街路樹の影が長くのびていた。いつもの定位置で丸棒のガードレールに掴まり、ふくらはぎを伸ばしてストレッチの真似事をし、少し色づいた稲田に向かって深呼吸をした。仕事帰りの車が途切れずに過ぎ去る。自転車乗りも、犬の散歩も日常は続いていた。
その時、不意に背後から可愛い声で、
「こんにちは！」
と声がして振り向くと、小学三年生位の女の子が、黄色い帽子で頭を下げた。驚いて、
「あ、お帰りなさい、さようなら」
と私は慌ててランドセルに手を振ってしばらく笑顔で見送った。見かけない子どもだがとても爽やかな女の子で、スキップしたくなるほど心が弾んだ。以前、新一年生におかえり、と声をかけたが返事がなく、うっかり声掛けもできないと複雑な思いをしたことがある。女の子に元気づけられ畑の傍まで来ると、機械に押しつぶされ芽も出ないまでに痛めつけられていた畑のあちこちに、南瓜やキュウリらしき葉が伸び、「ウド」はと見ればそれらしい葉が「あるじ」の姿や声を探し所在を訴えているかのように、健気に居場所に根付いていた。機械の力をもってしても一度根付いた草はやすやすとはめげない。私はのびろ、のびろと呪文のように人のいない草どもに声援を送る。どこかで畑の復活を待っている。
おじさんとは友達でも仲間でもなく、住まいや名前さえ知らない希薄な間柄のまま、消息を尋ねる手がかりはなにもない。
こんなにもあっけなく、ある日を境にぷつりと消息が途絶え、長尺フィルムの映像が切れてしまうものなのか。それでも私はゆるゆると歩きながら、黙々と草を引くムギワラ帽子の映像が頭の中に貼りついて離れない。

二度とないもう一度

長岡郡本山町　川村智保

写真で見た時はもっと落ち着いたデザインだと思っていたのに、広げたカーテンは想像とかけ離れたもので、呆然となった。だが、貼り替えられたばかりの白い壁に差す光の眩しさに、渋々レールに手を伸ばす。

吊り下げたカーテンが、ワックスで磨かれた床の上に影を作るのを、脚立代わりに使った椅子に立ったままで、和美はぼんやりと眺めた。

白い布に刺繍された花は、紹介ページに載っていた写真より明らかに色が濃くて大きかった。しかも、花の中央は桃色のスパンコール付きで、あまりのチープさに溜息しかでない。

「これはまた、可愛い趣味をお持ちで」

重そうにダンボールを抱えたまま、覗き込むように顔を傾けて廊下に立つ雅紀を睨みつける。

「俺さ、お前の好みに合わせて落ち着いた色のラグを買ってきたんだけど。もしかして、ピンクが良かったか？」

「そう、飛び切り派手なやつね」

和美の言葉に雅紀は苦笑いを浮かべた。

「まあ、落ち着いたら買い直せばいいだろ。で、この荷物はどこに置けばいい」

「隣の部屋にでも入れといて」

「了解」

抱え直すように箱を揺らして頷いた雅紀から視線を戻し、諦めたように息を大きく吐き出してから、窓を開ける。すぐに強い風が流れこんできて、カーテンを大きく揺らした。

「念願の角部屋だろ。そんな顔するなよ」

「……私、どんな顔してた？」

「やり直したいって、そんな顔かな」

「返品できないのよ、これ」

「まあ、そう都合よくはいかないだろうな」

雅紀は和美の隣に立つと、窓の下に目を向けた。

「しかし、家賃が安い理由がアレとか、どうなん

だ？」
　和美も椅子から降りて窓枠に手を掛ける。
「お墓が見えるってだけでも、やっぱり気にする人がいるからなんじゃない？」
　私は平気だけど、と和美は小さく呟いた。
「すぐ隣にゴールが見えているのって、そんなに悪くないと思うの」
「ゴールって、お前」
「最後はここでしょう？　辿るコースは違うけど、行きつく場所はみんな一緒」
「……お前が平気だって言うなら、俺はもう、どうでもいいよ」
　互いにダンボールの中身を確認し始めた頃、ようやく引っ越し業者が到着し、家具が運び込まれる。
　雅紀が買ってきたベージュ色のラグの上に使い慣れたテーブルが置かれると、他人行儀だった部屋の雰囲気が幾分柔らかくなって、和美はやっと肩の力を抜いた。
「なあ、これは何処に置く？」
　指示した場所に家具が並べられて、業界ナンバーワンだとかいう笑顔と請求書を残して業者が帰ったあと、雅紀が最後の荷物を抱えて部屋に入ってきた。
　広くもない部屋を見渡すように視線をぐるりと向けてから、和美はテーブルを指差した。
「やっぱり、ここが良いかな。あ、まだ布は取らないでね」
　和美がダンボールの中からランチョンマットを引っ張り出し、テーブルの真ん中に敷いたのを確認してから、雅紀はその上にそっと腕の中の物を降ろした。
「やっぱり引っ越しは疲れるな」
「まだ、荷物の片付けが残ってるけど」
「のんびりやればいいさ」
「そうだね」
　大きく両腕をまわした後、肩をほぐすような仕草をしてから、さて、と呟いた雅紀が和美に顔を向けた。
「忘れ物、もうないよな」

「うん、大丈夫」
「じゃあ、そろそろ俺、帰るわ」
「……手伝ってもらったし、ご飯でも、とか思ってたんだけど」
「悪いな。明日の仕事も、早出なんだ」
「そっか」
壁際の、無造作に転がしていたベルトポーチを拾い上げる雅紀の背中を眺めながら、こんな時、駐車場まで見送ってあげればいいのか、それとも、玄関までいいのだろうか、と和美はどうでもいい事を考えていた。部屋を出て行った雅紀を追うことも出来ずに立ち尽くす。歩き出すタイミングはいつだろうと途方に暮れる自分の足に視線を落し、急かすように何とか一歩を踏み出して廊下に出た。
雅紀は、和美が部屋から出てくるのを待っているみたいに、靴ひもを結び直していた。
「俺も、近いうちに引っ越すか」
「疲れるよ？　引っ越し」
「まあ、そうなんだけど。一人で住むには広すぎるだろ、あの部屋」
急に大声を出したい衝動にかられ、しかし和美はそれをこらえると、振り向いた雅紀の顔をじっと見た。
「……私、今どんな顔してる？」
雅紀は小さく笑う。
「そうだ、忘れるところだった」
和美の問いには答えず、ポケットの中から一枚の紙を取り出すと、雅紀はそれを和美に向かって差し出した。受け取ったそれは一枚の名刺で、店の名前と電話番号が書かれているだけの、ひどく素っ気ないものだった。
「俺の友達で、勇二っていうんだけどさ。この店でバイトしてる。ここから遠くはないみたいだし、行くことがあったら、よろしく言っといてくれないか」
「……わかった」
雅紀がドアを開けると同時に、廊下の奥から部屋の空気を押し出すように勢いよく風が吹き抜けた。まるで、雅紀を追い立てているようで、和美

は言い訳をしたくなる。
「元気でな」
「うん。またね」
次なんてもうないのに、つい口から飛び出した言葉に、雅紀は一瞬だけ妙な表情を浮かべ、それでも、
「ああ、またな」
と、笑ってドアを閉じた。

部屋に戻ると、風で飛ばされた布が床に落ちていて、テーブルの上に置いた水槽の中をベタが忙しなく泳いでいる。威嚇するようにヒレを大きく広げて泳ぐ様が、何時間も車の中で揺らされ続けた疲労と、それを癒すための眠りから理不尽に叩き起こされた不満を訴えていた。
警戒心の強いベタが、水槽に触れた和美の指先に反応し、さらに大きくヒレを動かす。
「……置いてかれちゃった」
そう声に出してから、違うな、と思い直す。あの部屋に一人、雅紀を置き去りにしたのは私だった、と和美はガラスに触れていた指を離すと、呆気ないほど短かった最後の、別れ際に渡された手の中の名刺をクシャリと握り潰した。
長い時間を掛けて話し合った結末の、終わりが近づくほどに寂しさと後悔を強くしたのは和美の方で、反対に雅紀は、仕事に打ち込むことで、感情を上手に昇華させていったのだろう。早朝から家を出て夜遅くに帰宅する雅紀に、顔を合わせ辛かった和美はホッとすると同時に、友人たちの結婚を急かすような話題に怖気づいて逃げ出そうとしているだけの、自分勝手で我儘で、未熟な感情に嫌悪する日々を、ただ送っていただけだった。
それに気付いていた雅紀の優しさが、この名刺だったのかも知れない、と和美は思う。
和美が会ったことのない雅紀の友人が、二人の間を、これからも繋いでいてくれる、それを示すものだからだ。
だからこそこの名刺は、今すぐにでも部屋を飛び出して追いかけてしまいそうになる、情けなくて叫びたくなるほどに、和美が持て余している弱

さを助長するだけの厄介なものでしかない。
乱暴に丸めた名刺をごみ箱に投げ入れ、さっきから視界の端に入ってくる鬱陶しいカーテンを、窓を閉めて大人しくさせてから、まだ落ち着かない様子で泳ぎ回るベタの水槽に拾い上げた布を被せた。
数分としないうちに闇を勘違いした魚は、ゆっくりと夢の中を泳ぐだろう。朝になって布を外した時に、この目まぐるしい変化を受け入れてくれていたら良いのに、と思う。
気に入らないカーテンの刺繍も、時間の経過とともに日に焼けて薄くなり、いつか気にならなくなるはずだし、スパンコールは思いきって取ってしまえばいい。
ごめん、という言葉は言い尽くしたが、ありがとう、だけは伝えることが出来なかったなと、閉めた窓ガラス越しに空を見上げた。
もうすぐ、日が暮れる。その前に少しだけ、これから住む街の中を歩いてみよう、とカバンに手を伸ばした拍子にゴミ箱が倒れ、丸めた名刺が床を転がった。
その瞬間、これまでずっと押えつけてきた様々な感情が喉を突き上げた。小さく震え出した手足から力が抜けて身体を上手く支えることが出来なくなると、そのまま床の上に座り込んで、和美は声を上げて泣いた。
名刺を渡してきた雅紀を恨み、何も考えずに受け取った自分自身を恨み、会ったこともない勇二を恨みながら、これから先、雅紀との繋がりを求めて無意識に店を探しながら街を歩くだろう、後悔と未練だけを抱えたすぐ先の未来を想像して、薄暗くなっていく部屋の中、一人になった心細さと不安から身を守るようにうずくまり、和美はいつまでも、子どものように泣き続けた。

詩

1分と40秒

土佐郡土佐町　矢野　ゆかり

もし、1分40秒きっかり、
与えられたらなにをしよう？

お気に入りのカップラーメンを作るのには、
短いし。
「カレーは飲み物」と言い張る人もいるぐらいだから、
カレーを飲み込んじゃおうかしら。

ジョウロに水は貯められる。
けれど、花に水は行き渡らない。
動物園には行けるわ。ご近所さんならね。
入口で「ストップ!!」
行き止まりだけれど。

恋をするのには充分過ぎる時間ね。
恋に時間はいらないし。
時間から逃避したランデブー。

愛を囁くには、充分。
愛を理解するには不充分。
これには、ながーいながーい、
時間が必要だから。

1分と40秒。長いようで、短いようで、
60秒と40秒。足して１００秒。
たったの、１００秒。

あなたの終わりまで、あと１００秒。
終末時計はあと１００秒。
長いようで、短いようで、
なにもかにもが終らず、おわる。

この詩をよみ終えた、あなた。
あと10秒。

おわり。

湯灌の儀

四万十市　山崎詩織

シャボンの泡が父をくすぐる
洗い流す　落ちるなにか

無念だと言うのだろうか
握りしめたふたつのこぶし
もうそれはいいのですよと
やわらかな泡が語りかける
こぶしはぎゅっとして白い涙を流す

冷たいからだから湯気がたつ
なんと心地よく横たわる父
もうそれは悲しみではなかった

清らかな魂の安らぐときを
肩の荷をおろしたように眠り続ける父

たったひとつの未練さえも
もはや過去の出来事のように
泡立てて洗い流せば消えて
ぽとりぽとりと落ちていくのだった

これにて湯灌の儀を終らせて頂きます
若い男女が深々と手をついて頭を下げる

ああさっぱりした　さあ行くぞ

白装束に身を包まれた父は最後にそう言う

３ＤＫの戦地或いは祈りのない教会

高知市　阿部美晴

父の歩行補助車は容赦なく
私を蹴散らす
言葉は機関銃のように
私と母を攻撃する

母の前頭葉は破壊して
無表情で遠くを見つめる
あきらめと怒りが混ざる爆弾を抱え
私は時が過ぎるのを待つ

ここはレビー小体型認知症の父と
アルツハイマー型認知症の母と
うつの私が住んでいる

３ＤＫの戦地

父は髭を剃り髪をとく
間もなくヘルパーさんがやって来る
説教に耳を傾ける信者のように
父はおごそかにヘルパーさんに対応する
３ＤＫは一変して
古びた小さな教会に

居心地の悪さで向かう
スーパーのフードコート
悲しみを落とし込みながら
ゆっくりとコーヒーを飲む
行き交う人々が余りにも安穏と
してるから
私も幸せそうな振りをして

勝者のいない３人の戦いは
いつか終わり
行き交う人々に
私は混ざることができるのだろうか

chagrinが膝の上にポタポタ
大切な君を忘れていない証は
水に溶けこぼれ落ちるchagrin
君が残したのは悲しみと寂しさだけなのか

仕事を終え俯いて自転車を押す
ふと気配を感じて見上げれば満天の星
あれっ君が笑っている　そんな気がして
立ち止まってずっと見上げていた
ああこうすれば涙はこぼれないよね
空の上の君に話しかけたら
それってまるで九ちゃんの歌だよと
軽風が頬をそっとくすぐる
君が笑った気がしておもわずクスッ
久しぶりのクスッ
明日はたぶん晴れだねと心を音にしてみる
過去ではなく未来を言葉にしてみる

chagrin（シャグラン(悲しみ)）に君をそっと包んで

高知市　下　元　真　人

心にからみつくchagrinは水に溶け
膝の上にポタポタ　ポタポタ
順番を間違えた君は星になったか
風になったか何もわからないけれど
水に溶けたchagrinが膝の上にポタポタ
『君はいまどこにいるの？』
いつもと変わらない朝が来て
いつもの卵かけご飯を体に流し込んで
時計を気にしながらペダルを踏み
作り笑顔で　ええやっと落ち着きましたと
でも夜になるとchagrinが膝の上にポタポタ
寝て起きて寝て起きて寝て起きて
生きるために食べ食べるために働き
働くために笑って　もう大丈夫ですと
いつしかchagrinはただの寂しさにかわる
でもやっぱり夜になると膝の上にボタボタ
『どうすればもう一度君に会えるの？』
寝て起きて寝て起きて寝て起きて
いつしか寂しさは思い出になるけれど
それでもやっぱり夜になると

手の中

高知市　栗山文子

幼子の手の中の虫
遊んでいるうちに
長い後ろ足が一本とれた
ちょっと貸してと言われても
木の実と換えてと言われても
彼は少し見せるだけ
もう一本の後ろ足もとれた

小さくなった手の中の虫
逃がしてあげようの一言に
彼はぐっと手を握る

宇宙の手の中の青い星
汚し　暴れ　殺し合うのは
ここから出たいから？

手の中のひしゃげた虫
動くおもちゃが無くなって
靴でぐちゃぐちゃに踏み潰された

宇宙の手の中の光る星
一つの種も傷つけず
分け合うことを知っている

眼差し

高知市　都築悦子

「だれ」と言う目で見つめてくる
入室してきたのは家族ではない
目をそらしてうつむきこむ老女
テレビはアンチエイジングの商品を
声高に宣伝する像を流している
コロナの情報を載せた新聞が
たたまれたままテーブルにある
起きているのか眠っているのか
うつむきこむ姿がある

眼差しの矢を打ってくる母
ここに居なければならない不満と

ここに入所させた娘への不信の矢
帰り際には「気をつけて帰り」と言う
その時視線は一瞬和らぐが
車椅子に坐る母の
会う度に目の奥の暗さが深くなる
どう答えていいかわからない
どうすることもできない我が身
人の手に委ねなければならない
事情を盾にして足早に退出する
あからさまに出すことはできず
表層と内なるものが離れてゆく
痛みなしには生きられない
いつの日にか
母の坐っている位置に坐るだろう
私も母と同じような目をするのだろうか

T君へ

四万十市　小笠原　毅

T君、時の経つのは早いものだね。
もうすぐ、君の八度目の命日がくる。
全く突然の君の死。
あの夜は満天の星が美しい、とても寒い夜だった。
些細なことで両親と口論した君は、泥酔したまま家を飛び出し、翌朝未明、道路側溝にうつ伏せのまま倒れていたという。
不慮の死。
全く、人がこんなにも易々と死ねるものなのだろうか、君の死を知らせた夕刊の記事

を僕は不思議な程の実感のなさで読んだのを覚えています。

がっしりとした大人のような体躯を持ち、日焼けした顔を屈託なくほころばせて笑う君は、なぜか、札付きの不良少年として先生や近所の人達の不評を買い、当時の僕にはわからない所で一人、それらを体一杯に受け留めていたのであろう。
君の心身を導いていた意思。
僕には兄のように優しい君の面影しか、思い出せないで居る。
僕は、ふと、果てしなく暗く寒い道をふらふらと歩き続ける君の後姿を想い浮かべることがある。
月も人影もない深夜の路上。
秋とはいえ、震えるほどの寒さの中を酩酊した君は一体何を想いながら彷徨ったであろうか。もはや知る術もない。
嗚呼、できるなら時をあの夜にもどし、

酔って彷徨う君を背負って、疲れた君の安らげるところへ連れていきたい。
どこへ行けばいいのだろう。
今の僕にもわかりはしないのだが・・・。

ひとときき

高岡郡佐川町
和田由香

日曜日
玄関のたたきを掃き上げ
午前十時半
上がり框(かまち)に腰を掛け
ぼんやりと斗賀野盆地を眺める

青田を吹き渡ってきた南東の風が
踊り場の「真実の木」をそっと揺らし
北の窓から抜けて行く
アラビアン風の香炉から
白檀のお香の白い煙が
いわさきちひろの絵画の

「虹を見上げるこども達」の前を
その横の観音笹を
その鉢の足元に置かれた忍ぶ玉の周りを
ゆっくりと流れて行く

緑の絨毯のような田圃
光る園芸ハウス群
その真ん中を東西に走るまっすぐな道を
音もなくミニカーのような車が走って行く
土手の桜は青葉が繁り
久しぶりの青空には
綿菓子のような白い雲が
西から東へゆっくりと流れて行く
そのすぐ下のあたりに
鉄塔をピカリと聳えさせ蟠蛇ケ森が鎮座する
西の山で鶯が鳴いた
一瞬間を置き裏山でも鳴き始めた

梅雨の晴れ間の日曜日

突然つむじ風が吹いた
干していたボーダー柄のパラソルが
ころころと転がって行く
さあ　そろそろ腰を上げなければ
コロナ禍の世界に　戻って行かねばならぬ

でんとした存在

高知市　千里日月

ちょっとした油断
詰めの確認が甘く
間違った結果を公表した
　叱責
　非難
　嘲笑
信頼を失い
これまでの業績も
積み重ねてきた努力も
築き上げてきた信用も
すべてが消え失せた

幾晩枕を濡らしただろう
自分を責め続けることで
無になりたい気持ちを堪え
何とかこの世に踏みとどまった

こうありたいという己の姿への
執着だったんだろうか

そんなある日
見失ったと思っていた自分の中に
潰そうにも潰せない
何者かが
でんと居ることに気づいた

それは固まりではなく　拡がりであり
悲しみではなく　喜びであった
思考ではなく　意思であり
一瞬であったが　永遠に思えた

捨て切って

捨てることができない
そんな
何者かが
でんと居た

笑

四万十市　尾崎弘二

大きな　芋の中に
のどかな　田舎が
匂ってくる様な
感じがしてきます。
いつ見ても　笑い顔が
絶えない　そのお顔は
見ていて　とっても
楽しいです。

うつら　うつら

高知市
甫木恵美

まどろむじかん
ゆめかうつつか
どっちがどっち
いきつもどりつ
うつら　うつら

ゆめでしか
あえないひととの
ひとときを
たのしむ
ひたる
もぐりこむ

あいたいひとに
ふれたよろこび
じわじわ
ふわふわ
じんじん

そんなときは
つづきをみたくて
そーと
ゆめのなかへ
うつら　うつら

ゆめのようなうつつ
うつつのようなゆめ

いまあるうつつ
ゆめのうらがえし
ものがたりの
つづきを
つむぐ

短

歌

高知県文芸賞一首

手相見の顔をして孫の手をひろげ小さき線に未来を語る

吾川郡いの町　西原時子

高知県文芸奨励賞五首

ウイルスは鳥の如くに渡り来し日本列島に花の咲く頃

高知市　岡松模子

コロナとて諦めさせし珊瑚婚の旅のチラシへ栗を分け合ふ

高岡郡四万十町　熊谷敏郎

被爆者手帖携え生きて来しことを知りしは叔父の晩年の夏

高知市　多田眞理子

ウイルスも「排除」だけでは貧しき世「共に」が新たな豊かさを生む

高知市　田上悦子

かみなりがピカッと光り飛びあがるねこはすぐさますがたをかくす

土佐市立高岡第一小学校六年　中平琉央

佳作五首

孫のいて息子のいて娘のいて姪のいてなぜに淋しいあなたがいない

高知市　北添起代子

弁当は時代を映す鏡なり今飽食の裏に飢餓あり

高知市　梶原和歌

三角は普通の印新聞の「今日の運勢」普通でいいよ

香美市　大石綏子

せんぷう機首を回してさがしものいつまでたつも見つからないな

土佐市立高岡第一小学校六年　山本咲愛

秋の風わたしをそっと押してくる中学校への別れ道だよ

土佐市立高岡第一小学校六年　戸梶沙南

俳

句

高知県文芸賞一句

斎田は原野に戻り葛の花

四万十市　安西佐和

高知県文芸奨励賞五句

三戒を座右の銘に羽抜鶏

高知市　古田彩香

胡瓜にも遊びごころのある曲り

高岡郡佐川町　浜田博子

柚子の香や一村包む風となる

南国市　井上志津

人手にわたる家の銀杏匂ひけり

高知市　山路一夢

カルストの積んだ干し草天の川

高知大学教育学部附属中学校三年　橋田千春

佳作十句

西瓜食ぶ理系文系隔てなく

室戸市　山本世志恵

大仏の手相シンプル若葉風

土佐清水市　山下昭文

青鬼灯少年院の鉄格子

南国市　山﨑光子

枕辺やほうたる放ちくれし父

土佐清水市　山﨑紀美子

冬耕の日がな一人の音の中

高知市　岡林知世子

どの道も家に行き着く秋の暮

香南市　乾真紀子

秋草へ子が押しくれる車椅子

土佐市　矢野重雄

椋大樹芽立ち南学生れし地

高知市　西込とき

夕焼が悔し涙を止まらせる

高知大学教育学部附属中学校三年　長山凜

友の声さえぎったのは蟬の声

高知大学教育学部附属中学校三年　岡林愛

川

柳

高知県文芸賞一句

蝶だったあの日背中を押したのは

高知市　立花末美

高知県文芸奨励賞五句

欠食へアンパンマンの飛行雲

土佐清水市　辻内次根

すぐに逝く約束だったのにごめん

四万十市　遠近哲代

部分日食だれか太陽食っちゃった

土佐市立高岡第一小学校五年　前田直希

本当に良いかと聞いてくる角度

高知市　近藤真奈

遠いけど道のきれいな方を行く

高知市　山本登

佳作九句

触れる手の心が僕に詩をくれる

四万十市　近藤　糾

雁来紅いつも火種のあるくらし

南国市　山﨑　光子

平凡にナンジャモンジャが咲いている

須崎市　徳永　逸夫

紺碧の雲なき空に似(え)非(せ)と言う

高知市　曽我部仁志

温暖化大河は竜と化してゆく

高知市　桑名知華子

戦争を知らずに僕は老いてゆく

高知市　髙橋治光

秋の風秋秋秋と言っている

土佐市立高岡第一小学校五年　中村蒼真

三密を遊び疲れた羊たち

香美市　楠瀬美香

カサブタがポコッと取れた風が吹く

宿毛市　江口桂子

審査評

短編小説審査評

今年の応募作品数は三十五編。十三歳から八十八歳まで、幅広い年齢層からの応募があった。今年は新型コロナウイルスによる生活環境の変化がここにも影響したのか、応募数は過去と比べてやや少なめであった。特に中、高校生の応募減少が顕著であった。世の中や自身がどんな状況にあろうとも、紙と筆記用具さえあれば自由に世界は創り出せる。今の思いを作品世界に昇華させることも可能である。苦境の時こそ、読み手を感動させる良い作品が生まれると信じ、今後に期待したい。

今回も様々な作品が机上に上がったが、審査の結果、次の三作品を入選とした。

文芸賞「最後の帰省」は空き家となってしまった岡山の実家を売り渡す決心をした男の感慨、寂寥を描いた作品。家が売れるまでの顛末に枚数が割かれているが、そこをもう少し刈り込み、今は亡き家族らの息遣いや匂いのようなものを描くことにもっと熱量を注いだ方がよかったか。しかし、空き家問題は今日的で、文体も読みやすく瑕疵もなかったことが評価された。主人公の思いも共感を持って伝わってくる、読後感のよい作品だった。

奨励賞一席「消えた人」は畑仕事に精を出すおじさんとの淡い交流と、当たり前のようにある日常が一変してしまう儚さ、再生を描いた作品。いつ見ても美しく整えられている畑、作物へのいたわりといったものを通して、おじさんの人柄が力みなく表現できている。おじさんが突然消えてしまった後、根こそぎ掘り返されたかに見えた畑に野菜たちの力強い再生を見る。おじさんもどこかで無事にと願う語り手の思いも伝わってきた。よい比喩もあり、牽引力もある作者だが、言葉足らずな表現への指摘があり、最後まで足かせとなってしまった。推敲の大切さである。

奨励賞二席「二度とないもう一度」は結婚に至らなかった男女の別れの場面を描く。女性の引っ越し作業とそれを手伝う男性を通して、二人の中にある後悔と未練を整った文体で表現しているが、それが「切なるもの」として今一つ伝わってこない弱さが残った。本気の恋愛を見た気がしない残念さだ。心の綾を扱うのは簡単ではないが、作者独特の感性を生かし、再挑戦してほしい。

他に、輪廻転生を題材にした「魂齢を量る階段」（小原友紀）の文章力や、独身中年男性の悲哀を素朴に描いた「くもり時々雨」（大谷豊）、トレンディドラマにあるような恋愛譚「夜の観覧車」（安藝友知史）も議論を呼んだ。

（審査員――杉本雅史、若江克己、文責・米沢朝子）

詩審査評

応募数五十二編。文芸賞は矢野ゆかり「1分と40秒」。時間という言葉は日常的に使われているが、時間とは？と立ち止まって考えると答えは容易ではない。それだけに、「1分と40秒」という時間を設定しての詩的時間論に興を覚えた。「愛を囁くには、充分。／愛を理解するには不充分。」なるほど、言われてみれば……。そして「終末時計はあと100秒。」と言われると、核戦争や気候変動の問題を考えざるを得ない。「なにもかにもが終らず、おわる」かもしれない。ちなみに、核戦争について世界終末時計はこの一月、残り「1分40秒」を示した。

奨励賞は五編。山﨑詩織「湯灌の儀」。納棺、出棺の詩に対して湯灌の詩は少ない。湯灌の儀が終った後、「ああさっぱりした　さあ行くぞ」――彼岸への旅立ちであるが、この世における旅の出発を思わせるような元気な科白（せりふ）である。作者の、父への深い愛惜の心が生み出した一行である。

阿部美晴「3DKの戦地或いは祈りのない教会」。タイトルに「戦地」という言葉を呼び込んだのも無理からぬこと。唐突だが、リルケの『若き詩人への手紙』の一節を引く。「あなたの夜の最も静かな時刻に、自分自身に尋ねてごらんなさい、私は書かなければならないかと」。「戦地」にいる以上戦わなければならない。書き続けなければならない。

下元真人「chagrin（シャグラン（悲しみ））に君をそっと包んで」。「フランス語で書き、それを日本語に翻訳しました」と欄外に注記があり、原稿は横書きであった。逆縁の悲しみは深いが、悲嘆に溺れず詩的対象化がなされている。フランス語から日本語へ、この言語操作もプラスに働いたかもしれない。

栗山文子「手の中」。子供は時に恐ろしいほどの残酷さを見せる。いや、人間というものが残酷な生き物である、と言わなければならない。しかし、一方で「一つの種も傷つけず／分け合うことを知っている」のも人間である。後者の人間性を涵養（かんよう）することで、宇宙の中の青く光る星に未来を、と読みたい。

都築悦子「眼差し」。人はこの世に生を得て死を迎えるまで、数限りない眼差しを見せる。この詩はその眼差しという点から老いの姿を描いている。「会う度に目の奥の暗さが深くなる」母。いずれこの「私も母と同じような目を……」。それにしても、老いの眼差しをしかと受け止めることは難しい。

（審査員――長尾軫、林嗣夫、文責・小松弘愛）

短歌審査評

応募は一二二人から三三四首、最高齢九十九歳、最年少は十一歳と幅が広く、生活のなかで短歌が愛好されていることを感じた。学校からは高知大学教育学部附属中学校・高岡第一小学校から。次の六首を入賞と決定した。

文芸賞

手相見の顔をして孫の手をひろげ小さき線に
未来を語る　　西原　時子

情景が浮かんでくる。初句にユーモアが感じられ、孫の小さな手の線を仔細になぞりながらの会話は未来へ及ぶ。平和であれよ、幸せであれよの願い。不安に満ちている今だが「未来」に希望を感じさせる底力ある作品。

文芸奨励賞

ウイルスは鳥の如くに渡り来し日本列島に
花の咲く頃　　岡松　模子

新型コロナウイルスが世界に蔓延し、日本も例外ではないが、このウイルスへの恐れや敵対を感じさせない詠いぶりである。春に鳥のように来たと。人間が壊した自然から人間界に来たと言われているウイルス。人間が社会の在り様を反省すべき機会である。

コロナとて諦めさせし珊瑚婚の旅のチラシへ
栗を分け合ふ　　熊谷　敏郎

結婚三十五周年の旅は諦めた。チラシの上の栗が印象的。夫婦で分け合う栗の味わいがしみじみ。収束はおろか冬に向かって感染は拡大している。

被爆者手帖携え生きて来しことを知りしは叔父の
晩年の夏　　多田　眞理子

被爆のことを語ることのなかった叔父だろう。晩年に知った機会のことが色々と想像され余韻に。国連でついに核兵器禁止条約が来年一月二十二日に発効することになった。唯一の被爆国日本の政府は署名を拒否し続けている。

ウイルスも「排除」だけでは貧しき世「共に」が
新たな豊かさを生む　　田上　悦子

人類の歴史はウイルスと切り離せない。コロナを前向きに受け止め言い切って鮮明。

かみなりがピカッと光り飛びあがるねこはすぐさま
すがたをかくす　　中平　琉央

ありのままを歌にして、なんとも魅力的。跳び上がるのは作者。「す」の反復もよい。

佳作

北添　起代子・梶原　和歌・大石　綏子
山本　咲愛・戸梶　沙南

（審査員――中野百世、文責・梶田順子）

俳句審査評

応募六八六句、人数一九九名、コロナ禍の中から応募、ゆるぎない俳句への志が心強い。年齢は、十歳から九十二歳まで。七十歳代がいちばん多く四十五名。六十代、八十代とそれにつづく。人生百歳といわれるようになってくる。若年層の少ないのは心配される。十代九十名と多いのは、中学校の熱心な指導者に支えられている。

その中からの文芸賞は、

斎田は原野に戻り葛の花　　安西　佐和

斎田は、神に供える米を作る田、注連を張り巡らせて大事に育てる。それがいつの間にか廃れて、原野になってしまった。葛は、立ち木でも覆ってつつみこむ。神を祭る人さえ居ない。過疎のすすむ山里の移りと、わびしさを、確かに描き出している。

次に文芸奨励賞。

三戒を座右の銘に羽抜鶏　　古田　彩香

「三戒」は三つの戒め、論語にいう。若年の時は「女色」。青年の時期は「闘色」。老年の時は「利得」を戒めよの三戒。これらを座右の銘として自分も常に戒めにしようとする。それに、結句「羽抜鶏」ととり合わせるところに句の趣き。羽抜鶏を自分の姿として重ねたのであろうか。いかに生きるか。真剣に人生に対している。

胡瓜にも遊びごころのある曲り　　浜田　博子

胡瓜は、それぞれが思い思いの形をもっているという。これを「遊びごころ」とみるところがおもしろい。それを人でいえば「個性」。

柚子の香や一村包む風となる　　井上　志津

高知は柚子どころ。その中でも「柚子の村」といえば馬路であろう。その精製の頃には、香りが「一村包む」といっても大げさでない。

人手にわたる家の銀杏匂ひけり　　山路　一夢

家も土地も人手にわたる。「大銀杏の家」といわれるほどの年を経た銀杏が、今年も銀杏を落とす。実に精製して食用にする。多くの人によろこばれてきた。想い出とともにあった銀杏が今年も落ちて地に敷きつめている。

カルストの積んだ干し草天の川　　橋田　千春

作者は、十四歳の中学生。土佐でいえば、天狗高原の姿であろう。カルストは石灰岩台地。白い岩石が一と山二た山こえてつづく。放牧された牛がのんびりと歩いたり横になったりする。飼料の干し草が積まれている。この句は、その静まり返った夜の景。「天の川」が白々と空にかかる。佳作の岡林さん長山さんも中学生。次代俳句の担い手が育っている。

（審査員――植田紀子、味元昭次、文責・橋田憲明）

川柳審査評

今年の川柳部門の応募総数は五百三十八句、応募人数は百十九人で昨年よりも一割多かった。今年の応募作品の特徴は、やはり新型コロナウイルスに関連したものが多く見られた。その一方で、自分の言葉で十七音字に切り取った骨格の確かな作品が目立った。

今年もジュニアの素直な表現の句に驚かされた。そして、コロナの休校もあったのに応募数も多かった。慎重に審査にあたり、次のように受賞作を決めた。

文芸賞は次の一句。

蝶だったあの日背中を押したのは　　立花　末美

生きてゆくなかで、大きな曲り角がある。決断を迫られるときに、ひとは迷う。その時に、最後の迷いを吹っ切る瞬間がある。今こうやって穏やかな日々を過ごせているのも、あの時にこころを決めたからだ。「蝶が背中を押した」とのやわらかな表現が素敵だ。「蝶だった」の散文的な上五が、読者をひきつける。蝶は、作者の大切な人の化身だったかもしれない。次に、文芸奨励賞。

欠食ヘアンパンマンの飛行雲　　辻内　次根

困った人を助ける、どこまでも優しいアンパンマン。アンパンマンは今日も忙しい。欠食は子どもだけとは限らない。お年寄りも冷蔵庫の食品が底をつくこともある。援助の必要な人の多い世相を切り取りながらも、気持ちをほっとさせる巧みな句。

すぐに逝く約束だったのにごめん　　遠近　哲代

「ごめん」が読者を笑いに誘う、ユーモア句。生前は、仲の良い夫婦だった。誰からもうらやましがられる二人だった。「どちらかが先に逝ったら、生きていてもしょうがない」と、話していた。夫が逝って十年。私は元気、ごめんなさい。

部分日食だれか太陽食っちゃった　　前田　直希

部分日食を「太陽を誰かが食べる」との見方は、大人にはできない。短詩はひとつの見つけだけでも、はっとするものであればこころをひきつけられる。きれいに化粧をしなくても、いい句はいいのだ。「食っちゃった」がいい。大きな大きな、はなまる。

本当に良いかと聞いてくる角度　　近藤　真奈

念を押す時に、首を少し横にして穏やかな口調で迫ることがある。一方で、目の前の正面から大声で、確認を迫る時がある。怖いのは、前者の首を少し曲げた方である。それは、「納得はしていないぞ」という微妙な角度である。

遠いけど道のきれいな方を行く　　山本　登

穏やかな表現と内容は、作者の人柄だろうか。危険性を避けて、安心安全で生きてゆく、それはひとつの信念、信条のようなものだろう。ぶれないでずっとそれを通してゆくと、きちんと満足の結果が得られるのだ。

（審査員――窪田和広、清水かおり、文責・小笠原望）

令和二年度高知県文芸賞
作品募集要項

一、趣　　旨

高知県文芸賞は、広く県民の皆様から作品を公募して、すぐれた作品を顕彰し、地方文化の発展と本県文芸の振興を図ることを目的としています。

二、主　　催

高知県・（公財）高知県文化財団

三、主　　管

高知県芸術祭執行委員会
（事務局　（公財）高知県文化財団内）

四、公募作品の部門

短編小説　一人一編
詩　一人一編
短　歌　一人三首以内
俳　句　一人五句以内
川　柳　一人五句以内

五、締　切　日

令和二年九月三十日（水）当日必着

六、作品送付先

〒七八一―八一二三　高知市高須三五三―二
（公財）高知県文化財団内
「高知県芸術祭執行委員会事務局」あて

七、発　　表

令和二年十一月上旬に本人及び報道機関あてに通知します。（令和二年十二月十三日に表彰式を行います。）

八、選　　賞

・短編小説
「高知県文芸賞」一名
「高知県文芸奨励賞」二名
・他の部門
「高知県文芸賞」一名
「高知県文芸奨励賞」五名
その他、佳作が選出される場合もあります。
受賞者には表彰状と副賞が授与されます。

九、応募時の注意事項

・類似（類想）作品の存在が明らかになった場合や、盗作が疑われる場合は、賞の発表後でもこれを取り消すことがあります。その場合に発生した著作権侵害に関わる問題は、応募者の責任となります。また、取り消しにより生じた損害（経費）については応募者に負担していただきます。

十、応募条件

未発表作品に限り、応募者は高知県在住者に限ります。

＊私的な会や学習会で発表した作品、メンバー内での回覧、資料とするための目的で活字化した作品は「未発表」とみなします。

＊その他、右記の基準等に則して、事務局が判断する場合もありますので、ご了承ください。

十一、作品への記載事項

①部門名　②氏名（フリガナ）＊ペンネームご使用の場合は併記　③住所　④電話番号　⑤年齢

を必ず明記してください。記載場所等は部門ごとに異なります。

鉛筆またはシャープペンシルの場合は、HB以上で濃くはっきり書いてください。

十二、部門ごとの注意事項

短編小説

■作品本文は四百字詰原稿用紙十枚。

■パソコンの場合、二十字×二十行で設定してください。

■必ず、作品本文にページ番号をふってください。ホッチキス留めは不要。

・一枚目：タイトルを明記

・二枚目～十一枚目：作品本文

・十二枚目：部門名・氏名・住所・電話番号・年齢を明記。

詩

■作品本編は四百字詰原稿用紙二枚、三十七行以内。

・一枚目：一行目上方に部門、作品名、二行目下方に氏名を記入。

（三行目はあけて）四行目から作品本文を書き始めてください。

・三枚目：住所・電話番号・年齢を明記。

短歌・俳句・川柳

■通常はがきを使用してください。

※学校から、まとめて応募の場合は、はがきサイズの用紙へ記入しても可。

その際、ご担当教諭名を封筒に記入してください。

■全部門とも自由題。作品は楷書・タテ書きで書いてください。

・はがき表面に部門名を必ず記入してください。

・氏名・住所・電話番号・年齢は作品末尾に記入してください。

＊応募作品は返却しません。

＊個人情報は、運営上の管理及び本人への連絡の用途に限り、利用させていただきます。

ただし、入選作品については、在住市町村名、氏名、年齢を公表します。

十三、審　査　員（五十音順）

短編小説：杉本　雅史　米沢　朝子　若江　克己

詩　：小松　弘愛　長尾　軫　林　嗣夫

短　歌：梶田　順子　中野　百世

俳　句：植田　紀子　橋田　憲明　味元　昭次

川　柳：小笠原　望　窪田　和広　清水かおり

十四、問い合わせ先

「高知県芸術祭執行委員会事務局」

（公財）高知県文化財団内

（ＴＥＬ　〇八八―八六六―八〇一三）

二〇二〇年十二月十三日　発行

編集発行　高知県芸術祭執行委員会

事務局　高知県高知市高須三五三－二

（公財）高知県文化財団内

印刷所　高知市城山町三六

西富謄写堂

（非売品）